



作文2部

農林水産大臣賞

のうりん すいさん だいじんしょう

# 庄内米は最高のお土産

山形県庄内町立余目第三小学校六年

園部 杏莉

「お米がお土産なの？」この夏、東京で暮らす親せきのおじさんの家遊びに行くことになった私が、母が準備したお土産を見て言った言葉です。「お米をもらっても喜ばないでしょ。もつといいお土産ないの。」と続けました。母は庄内のお米は自まんのできるおいしいお米で、どんな物より喜ばれるからと言って、東京に行く私より一足先にお米を東京に送りました。

初めての東京一人旅。飛行機に乗りながら東京で行きたいお店や町並みを想像して、心は躍っていました。ただ、お土産はもつとおしゃれな物にしてほしかったな、とずっと心に引つかかっていたました。空港に着くとおじさん夫婦が笑顔で迎えてくれました。

一人で乗った飛行機の旅ということもあって、東京の家に着いた頃にはひどく疲れていましたがそんなときでもお腹は空いてきて夕食の時間となりました。「庄内米届いたよ。ありがとう。」おじさん、おばさんの言葉になぜか恥ずかしくなって、「こんなものでごめんね。」と言いました。すると二人は「何よりのお土産だよ。山形は何でもうまいからな。杏莉は毎日おいしい物が食べられて幸せだなあ。」と話しました。自然に囲まれて暮らすことの幸せ、

東京には色々あるけれど、それは人が造りだした人工の物で見た

目は華やかだけど、おじさんは自分の生まれ育った場所でもある庄内が誇りでもあり、庄内米はいくつになっても自分に欠かすことはできないと話してくれました。私は急に恥ずかしくなり、夕食に出されたお土産の庄内米を急いで口にしました。するといつもの味にほっと落ちつくのを感じました。そして庄内の風景が目に見え、東京に来て初日というのに帰りたい気持ちにもなっていました。

翌日東京の街を歩きました。次々とくる電車。どこに行っても大勢の人。キラキラかわいいお店。話題の行列のできるスイーツ。どれも楽しくて新鮮で時間はあっという間に過ぎました。でも、大勢の人をかき分けながら歩く私の心には、なぜかずっと庄内の風景がうかんできます。鳥海山に種まきじいさんが現れる頃に田植えが始まり、夏には青々とした海のような田んぼにポツンとたたずむサギ。秋には黄金色の稲が風になびき、冬には田んぼに雪が降り積もる銀世界。元気がないときもお米を食べると不思議に元気が出る事。一粒のお米には七人の神様がいて、決して粗末にするなど小さな頃から教えてもらったこと。考えると私の日々の暮らしにはいつも田園風景があり、その地で多くの手間をかけて作られたお米で私の体が出てくる事。

「山形には何も無い。」という考えは間違っていました。庄内は私を育ててくれた大切な場所、すべてがあるところです。誰からも喜ばれる庄内米を、私はこれからもお土産に選びたいと思います。